

| | |
|-------------|---|
| Title | <大會抄録>百濟における中央と地方 |
| Author(s) | 田中, 俊明 |
| Citation | 東洋史研究 (1996), 55(3): 627-628 |
| Issue Date | 1996-12-31 |
| URL | http://dx.doi.org/10.14989/155015 |
| Right | |
| Type | Journal Article |
| Textversion | publisher |

のマクロな地方化の議論への興味から、本報告では、これらについての若干の史料を挙げつつ、地方長官が御史職を兼任する明清の制度が必要となる地方政治の状況が、南宋に存在した可能性を検討したい。

關中・三輔・關西

——關所と秦漢統一國家——

大 櫛 敦 弘

秦および前漢時代、首都圏である渭水盆地一帯の「關中」地域は、その名の通り、函谷關をはじめとする關所群によって圍繞されていた。その基盤となる特別地域を他から晝然と區分するこのような「國內の境界線」の存在は、當時の統一國家體制における「地域性」のあり方を端的に反映したものであるといえるであろう。

もともと、こうした「境界線」としての關所のあり方について述べた史料は必ずしも豊富ではないため、ここではこの關中地域の呼稱の用例に手がかりを求めることとしたい。すなわち當時、この地域は「關中」、あるいは「關西」「關内」など、關所との關わりにおいて區分、表現される例が多く見られるのであり、これらを「三輔」や「内史」などそれ以外の用例とあわせてその變遷・消長を整理・検討してゆくことによって——とくに史料が制約されている後漢期をも含めて——この境界線のあり方や展開についての、ある程度一貫した見通しが得られるのではないかと思われるのである。

以上よりここでは、(一)秦および前漢前期、(二)前漢後期、(三)後漢期、の三期に分けて、關中地域の呼稱の用例を検討する。そこからこの「國內の境界線」のあり方について見てゆき、さらには當時における統一國家體制の展開についても言及することとしたい。

百濟における中央と地方

田 中 俊 明

四七五年、建國の地漢城(ソウル江南地區)を高句麗の攻撃によって陥落させられた百濟は、急遽、南に熊津(公州)に都を定めて再興した。百濟の南方に對する關心は、その南下以來ようやく強まり、五世紀末から六世紀初にかけて、馬韓の殘存勢力(倭の五王のいう慕韓)を一掃して、南海岸までを領有した。そして五一〇年代からは、加耶地域へ進出し、西部加耶を領有していく。百濟が全羅南道地域までを領有するようになったのは、實にこの時期であり、それまでは馬韓の一部が殘存していたのである。百濟が古代の朝鮮半島の勢力分布圖において、早くから西南一帯を占めていたとするのは、まちがいである。こうした過程をまずあとづきたい。

そうした南方進出が一段落した上で、五三八年、泗沘(扶餘)遷都を敢行した。このように百濟の王都は、五世紀後半から六世紀半ばにかけて二度の變遷があった。熊津から泗沘への遷都は、近距離であったが(四〇kmほど)、その前の漢城から熊津へは大きな變化であり、すなわち百濟の中央が、大きく移動したということにな

る。當然それによって、王權を支える勢力の基盤も變化し、新たな支持勢力も登場した。それと同時に新たに獲得した領域に對する支配が進行していく。

このように、それまでの地方が新たに中央として再生し、新たに生まれた地方に對して、それを支配する構造が生まれてくる。このような複合的な百濟國家の再編過程を、中央と地方の問題を意識しつつ、追究してみたい。

セレウケイアとテースイフオーン

——アルシャク朝パルティアとギリシア都市——

春 田 晴 郎

アルシャク朝パルティアの性格については、イラニズムの復興、という視點で語られることが多く、先行するセレウコス朝との關係では、連續性はあまり言及されなくなっている。

セレウコス朝の王都の一つであるティグリス河畔のセレウケイアとその對岸にアルシャク朝が建設したテースイフオーン(クテシフオン)との關係でも、ブリニウスやタキトウスなどの記述に強く影響されて、兩都市をギリシア都市とそれに對抗する王朝の都市、と對立させて記述されていたりする。これは、ギリシア(ヘレニズム)文化を對立的に捉えることで、パルティアにおける前者の吸收攝取という側面を輕視することにも繋がる。

本發表では、アルシャク朝時代におけるセレウケイア——テース

イフオーンの歴史を、セレウケイアやバビロン出土の史料から検討する。そして、兩都市は全く分離したものではなく「複合都市」としての性格も持つこと、アルシャク朝とギリシア都市との關係は紀元後一世紀に變化はするがその前後とも必ずしも兩者は對立してはいないこと、を確認し、この王朝の「セレウコス朝の繼承者」としての側面も重視する必要がある、という説を支持する。

オスマン朝期カイロの「死者の街」研究序説

大 稔 哲 也

近年、筆者は西暦一二一五世紀のエジプト「死者の街」において、集團による參詣行為が爆發的流行をみたことを掘り起こさんと努めてきた。しかし、それに引き續くオスマン朝支配下の死者の街の實態については、ほとんど研究も見當たらな。さらにそれがいつ衰微を呈し、現在のように聖者生誕祭の隆盛へと移行していったのかについては、まったく今後の研究に託されていると言えよう。

そこで、今回、オスマン朝期の死者の街を考える上で不可欠の史料となるであろうシニファイビー(Muhammad b. Shu'ayb b. Muhammad b. Badr al-Din b. Ahmad 'Ali al-Hijazi al-Shu'aybi)の參詣の書 *Kitāb yashū'at al-'ala Dhīr man dafina bi-Mīsr al-Qahirah min al-Muhaddathin wa-al-Awliya' wa-al-Salihin min al-Rijāl wa-al-Nisā'* をおもに取り上げて検討する。本書はカイロ・アズハル圖書館にその寫本が存在することを、その目録か